

2012年に創設された移民の記憶アーカイブ(AMM)は、物語や自己の語り、そして何よりも移民を体験し、それを分かち合いたいと願う人々と、その経験を間近で、いわば内側から知りたいと願う人々の対話のための、現実とバーチャルの空間です。より一般的に言えば、このアーカイブは「共同体のアーカイブ」の一例であり、特定の分野や地域に関して残された証言を保存し、研究者や関心を持つ人々に提供する試みです。証言はしばしば、生き残りとの認知のための闘争に埋もれ、自らの歴史を保存する余裕もなく、関心もないことがありました。歴史家たちは通常、アーカイブに保存された物品を研究対象としていますが、多くのアーカイブは公文書館に倣って公的資料のみを保存する傾向にありました。数十年前から、必ずしも多数派や勝者ではない人々の実際の体験や、さまざまな必要性に駆られて集まった人々の集団の歴史を再構成するうえで重要な手掛かりとなる資料を、公式か非公式かに関わらず保存することの必要性が指摘されはじめました。特にイタリアでは、このような傾向がすでに一つの伝統として確立しており、国の中心部であるかを問わず、さまざまな地域で数多くの事例が挙げられています。10月23日(月)から11月11日(土)まで、青山学院大学が同大学ジェンダー研究センター・ギャラリーにおいて開催する展示会「忘却への抵抗：イタリアにおけるアクティビスト・アーカイブズ」は、ローマの移民の記憶アーカイブ、ボローニャ女性史アーカイブ(Archivio di storia delle donne di Bologna)、ボローニャのカッセロ LGBTI+センター(il Cassero LGBTI+ Center)の協力のもと実現しました。

「どこかにいるあなたへ」は、現在観客を求めている映画であり、見て、観察し、聴き、そして理解したいと思うすべての人に開かれています。ザカリア・モハメド・アリがランペドゥーサへと戻り、失われた記憶と物を求め、身元確認と追放センター(CIE)での滞在を回顧し、語ります。そのなかで、私たちが探し求められていた観客であるかどうか、映画は問いかけるのです。このイベントは、制作から10年を経た今、監督と直接対話する貴重な機会です。

「生き残りのことば」はランペドゥーサ島のゴミ捨て場で見つかった7枚の紙片に書かれたことばから生まれました。紙片はある移民のズボンの折り返しの内側に縫い付けられたプラスチック袋の中に折り畳まれていました。映画は観客とともに、失われた物を解釈し、おそらくバングラディッシュからやむを得ず逃れてきたと思われる名も知らぬ著者がなぜその言葉を残したのか、という理由を様々な観点から考えます。「ことば」は移民の記憶アーカイブがマーラ・マッタ氏とサンジェイ・ゴージュ氏の協力のもとに翻訳し、解釈しました。この短編映画は、周縁に追いやられた移民たちの歴史を保存するという移民の記憶アーカイブの使命を我々に紹介してくれます。